# 環境意識の創造

# （1/4）：自然の性質

“言ってやるがいい。「執り成し（の許し）は，凡てアッラーに属する。天と地の大権はかれの有である。やがてあなたがたはかれの**許に帰される。」”（クルアーン39節44章）**

イスラームは、生態システムやそれが支える生き物たちという地球上の全てのものは、主である神、唯一神によって作られ、その神に完全に依存した存在だとします。つまり人間は神よりも、海に生きる魚や空を飛ぶ鳥、そして地を徘徊する動物により近い存在ということです。

“地上の生きとし生けるものも，双翼で飛ぶ鳥も，あなたがたのように共同体の同類でないものはない。啓典の中には一事でも，われが疎かにしたものはない。やがてみなかれらの主の御許に召集されるのである。”（クルアーン**6章38節**）

人間は食物連鎖の頂点にいますが、それと同時に食物連鎖の一部でもあります。しかし人間の主である神は、食べたり、住居を探したり、子孫を残す必要はありません。そのことが理解できず、同じ人間を崇拝の対象とする人たちは、次の節について考えてみるべきでしょう。

“マルヤムの子メシアは，一人の使徒に過ぎない。かれの以前にも使徒たちがあって，逝ったのである。かれの母は誠実な婦人であった。そしてかれら両人は食べ物を食べていた。見よ，われは如何にかれらに印を明示した

**かを。また見よ，如何にかれら（不信者）が迷い去るかを。”（クルアーン5章75節）**

ここで暗に示されているのは、ある存在が、食物を必要とするなら、また排泄し、食べた物を処理する必要があるということです。神にそのような生理的必要があるはずはありません。

**“（ムハンマドよ、）あなた以前にわれが遣わした使徒たちは，一人として食べ物を食べない者はなく，町を歩き回らない者はなかった。”（クルアーン25章20節）**

つまり、預言者たちや彼らの教友、そして信仰者としての彼らの家族はこの地上に生きた、最も敬虔で優れた人々であったことに間違いはありませんが、彼らはあくまでも神の創造物であり、その命、糧、そして救いにおいて完全に神に依存した存在です。それゆえ 私たちが人と環境の関係を考えるとき、まず私たちは人と神との関係を考えなければならないのです。

## ウブーディーヤ　唯一なる神に従うということ

イスラーム教徒たちは、生物はみな、その創造主への服従という天性のもとに創造されたと考えます。つまり、全てがもとより神に服従しているなら、全ての自然的本質はイスラームだということです。チーターがカモシカを追いかけ、カモシカがチーターから逃げきったとき、それは神が命じた通りに動いていたというだけなのです。

**“天と地にある凡てのものは，かれに属する。万有は，真心込めてかれに服従する。”（クルアーン30章26節）**

創造物が神が定めた道に正しく従っているから、いわゆる自然の摂理、宇宙の自然摂理といった宇宙のバランスや調和が保たれているのです。この私たちの周りで起こっている神への服従は吹き込まれた天性に基づいており、それ自体が永続的な服従と崇拝なのです。クルアーンの中の多くの節がこの真実を語っています。

**“あなたは，天地の間の凡てのものが，アッラーを讃えるのを見ないのか。羽を拡げて飛ぶ鳥もそうである。皆それぞれ礼拝と唱念を心得ている。アッラーはかれらの行っていることを知っておられる。”（クルアーン24章41節）**

**“七つの天と大地，またその間にある凡てのものは，かれを讃える。何ものも，かれを讃えて唱念しないものはない。だがあなたがたは，それらが如何に唱念している**

かを理解しない。本当にかれは忍耐強く寛容であられる。”（クルアーン**17**章**44**節）

“天と地において，慈悲深き御方のしもべとして，罷り出ない者は唯の一人もないのである。”（クルアーン**19**章**93**節）

## フィトラ　人間の天性

人間もイスラーム的な天性、フィトラが備えられています。もしそのフィトラに従うなら、全ての人間はタウヒード（イスラーム的な一神教）に従い、その創造主を認識し、彼を崇拝し、良い行いをしようとします。クルアーンで神はこう言っています。

“それであなたはあなたの顔を純正な教えに，確り向けなさい。アッラーが人間に定められた天性に基いて。アッラーの創造に，変更がある筈はない。それは正しい教えである。だが人びとの多くは分らない。”（クルアーン**30**章**30**節）

つまりイスラームや、環境保護などの善行は教え込まれなければいけないものではなく、人間の深層心理を呼び起こすことで得られるものだということです。そのとき初めて人間は宇宙とつながります。全ての人間の魂は結局、少なくとも一度はその創造主を認識しているのです。

“あなたがたの主が，アダムの子孫の腰からかれらの子孫を取り出され，かれらを自らの証人となされた時を思え。（その時かれは仰せられた。）「われは，あなたがたの主ではないか。」かれらは申し上げた。「はい，わたしたちは証言いたします。」これは復活の日にあなたがたに，「わたしたちは，このことを本当に注意しませんでした。」と言わせないためである。”（クルアーン**7**章**172**節）

## （2/4）：地上における神の執事としての人間

“またあなたの主が（先に）天使たちに向かって，「本当にわれは，地上に代理者を置くであろう。」と仰せられた時を思い起せ。かれらは申し上げた。「あなたは地上で悪を行い，血を流す者を置かれるのですか。わたしたちは，あなたを讃えて唱念し，またあなたの神聖を讓美していますのに。」かれは仰せられた。「本当にわれ

はあなたがたが知らないことを知っている。」”（クルアーン2章30節）

人間は、彼らの父アダムを通して、ハリーファ、つまり、後継者、執事、信託者、代理の統治人、保護者として地球に送られました。つまり人間には
地球の資源、神が人間の必要の為に与えた資源を適切に利用する責任があります。

“アッラーこそは，天と地を創造され，天から雨を降らせ，これによって果実を実らせられ，あなたがたのために御恵みになられる方である。また船をあなたがたに操縦させ，かれの命令によって海上を航行させられる。また川をあなたがたの用に服させられる。またかれは，太陽と月をあなたがたに役立たせ，両者は飽きることなく（軌道）を廻り，また夜と昼をあなたがたの用に役立たせられる。”（クルアーン14章32～33節）

“あなたがたは思い起さないのか。アッラーは天にあり地にある凡てのものを，あなたがたの用のために供させ，また外面と内面の恩恵を果されたではないか。だが人びとの中には，知識も導きもなく，また光明の啓典もなく，アッラーに就いて論議する者がある。”（クルアーン31章20節）

それゆえ地球は絶対的な因果関係によって創造されています。つまり地球は人間がその目的、つまり主に崇拝し服従するため、神があしらえたものなのです。

“ジン（霊的存在）と人間を創ったのはわれに仕えさせるため。”（クルアーン51章56節）

神にしてみれば人間の創造より、天地の創造の方が偉大ですが（クルアーン40章57節参照）、人間は天地が抱えていない責任を負っています。実際、神は天と地に道徳的責任を負うかどうか、提示しました。しかし、両者ともその責任の重さを理解し断ったのです。そしてアダムは、その責任を全人類に変わって受け入れました。しかしながら、彼らの父とは異なり、多くのアダムの子孫は不信仰で、無能で、彼らの義務を果たす意欲すら持ち合わせていないのです。

“本当にわれは，諸天と大地と山々に信託を申しつけた。だがそれらはそれを，担うことを辞退し，且つそれに就いて恐れた。人間はそれを担った。本当に（人間は）不義でありかつ無知である。”（クルアーン33章72節）

人間がその本質に従い、神を崇拝し、彼に服従することでその託された信頼を果たすとき、彼は神の喜びと報酬を得ます。もしそれができないときには、彼には神の赦しが必要です。付随的に、人が誤った抑圧的な欲望に勝てないのは、彼自身の性質のせいなのです。人間と神の敵であるサタンによって正しい道から外れ、誤った道に進んでしまうのです。

> “かれ（サタン）は言った，「あなたは御考えになりませんか，あなたはこの者をわたしよりも重視されます。だがもし復活の日まで，わたしに猶予を下さるなら，僅かの者を除き，かれの子孫を必ずわたしの配下に致しましょう。」と言った。”（クルアーン17章62節）
>
> “アッラーはかれ（サタン）を見限られた。だがかれは言った。「わたしはあなたのしもべの中，相当の部分の者をきっと連れさるでしょう。またわたしはきっとかれらを迷わせて，その虚しい欲望に耽らせ，またかれらに命じて家畜の耳を切り，アッラーの創造を変形させます。」誰でもアッラーの外に悪魔を友とする者は，必ず明らかな損失を被るのである。（悪魔は）かれらと約束を結び，虚しい欲望に耽らせるであろう。だが悪魔の約束は，欺瞞に過ぎない。”（クルアーン4章118～120節）

人間とジン以外の全ての創造物は、それが生物であろうとなかろうと、本能的に神に服従し、その性質に調和しているという、私たちの自然環境において最も大事な事実と共に、私たちは人間がどのようにその自然性質を取り戻すことができるのかを学びました。つまり、それは神を崇拝し、かれに従うことです。そして賞賛に値する行いの一つが私たちのまわりの環境に責任を持つことです。環境とはここで、2つの領域と環境に分けられます。動物世界と自然環境です。

> “アッラーこそは海をあなたがたに従わせられた方で，かれの御命令によって，船はそこを航行し，あなたがたはかれの恩恵（の通商往来）を追求する。それであなたがたは，感謝するであろう。またかれは，天にあり地にある凡のものを，（賜物として）あなたがたの用に服させられる。本当にこの中には，反省する者への印がある。”（クルアーン45章12～13節）

## （3/4）：動物の権利とその侵害

“またアッラーは，ありとあらゆる動物を水から創られた。そのあるものは，腹で這い，またあるものは二本足で歩き，あるものは四つ足で歩く。アッラーは御望みのものを創られる。本当にアッラーは何事につけ全能であられる。”（クルアーン24章45節）

イスラームの天啓により、神は動物に国々の運命において重要な役割を与えていたことがわかります。上の節からもわかるように、結局私たちはみな水という同じ源から作られた存在なのです。

例えばサムードの人々の物語から、イスラームでは動物に対する倫理的な扱いを教えていますし、より正確に言えば、そうしなかったときの厳しい結果について教えています。神が神兆として送ったラクダにサムードの人たちが水を与えるを拒んで抑圧して殺したことから、たった一度の爆風でその国を破滅させてしまったのです1。

“サムード（の民）は，その法外な行いによって（預言者を）嘘付き呼ばわりした。かれらの中の最も邪悪の者が（不信心のため）立ち上がった時，アッラーの使徒（サーリフ）はかれらに，「アッラーの雌骼駝である。それに水を飲ませなさい。」と言った。だがかれらは，かれを嘘付き者と呼び，その膝の腱を切っ（て不具にし）た。それで主は，その罪のためにかれらを滅ぼし，平らげられた。”（クルアーン91章11～14節）

イスラームが、どのように今流行の所謂「動物愛護」を擁護しているか、そして動物に対する虐待的行動をどれほど重大な罪とみなしているかを正しく説明するために、預言者ムハンマドの言行録（ハディース）を見てみなければなりません。預言者ムハンマドが、鳥や動物の苦しみに対して同情心あふれる言葉をかけ、彼らの権利のために声を上げていることを見ても、イスラームが他の動物のために前例なき権利を与えていることは明らかでしょう。多くの言行録の中から、そのいくつかを見てみましょう。

「ある男が道を歩いているときに、激しい喉の乾きを覚えました。そのとき彼は井戸を見つけ、そこまで降りてゆき、満足するまで水を飲み戻ってきました。すると彼は犬が喘ぎ、湿った土を食べているのを見つけました。そして彼はこう言いました。「きっとあの犬も私と同じように喉の乾きを感じているのだろう。」そしてまた井戸まで戻り、彼の革製の靴下に水をくんで犬に飲ませてあげました。それに神は感謝して彼の罪を赦したのです。」教友たちが尋ねました。「神の預

言者よ！私たちは本当に動物への善行で報奨を得られるのですか？」預言者はこう答えました。「すべての生き物に対する優しさには報奨があるのです。」（サヒーフ・アル＝ブハーリー、サヒーフ・ムスリム、アブー・ダーウード）

「ある女性は一匹の猫によって懲罰を受けました。彼女はその猫を死ぬまで閉じ込めため、地獄の業火に入れられたのです。彼女はその猫に食べ物も飲み物もやらず、その猫が地面の虫を食べること許さなかったのです。」（サヒーフ・アル＝ブハーリー、サヒーフ・ムスリム、イブン・マージャ）

「誰であれ、ツバメでさえも理由なく殺した者は、審判の日に神からその事を問われるでしょう。」（アフマド）

「弓矢の練習に生きた動物を使ってはいけません。」（サヒーフ・ムスリム）

「以前送られた神の預言者が蟻に刺され、それが頭にきて、蟻の巣全部を燃やしてしまいました。そこで神は「たった一匹の蟻があなたを刺したという理由で、私を崇拝していた共同体を燃やしてしまったのですね。」と言って叱責しました。（サヒーフ・アル＝ブハーリー、サヒーフ・ムスリム）

「持ち馬によって報奨を得る者とは神のためにその馬を所有し、牧草地または庭に長いひもで繋げておく者です。その人は、馬が牧草地または庭で草を食べられるだけの距離分の、報奨を得ます。もし馬がそのひもを断ち、一つ二つの丘を越えたのなら、その蹄とこやしの跡の分だけ報奨を得ます。その馬が川を渡り、その川から水を飲んだのなら、それも馬の所有者の善行として数えられます。」（サヒーフ・アル＝ブハーリー）

「馬の前髪を切ってはいけません。品性がそこにあるのですから。またたてがみも切ってはいけません。それは馬自身を守る為にそこにあるのです。しっぽの髪も切ってはいけません。それはハエを追い払うためのものです。」（アブー・ダーウード）

「ある人が牛に乗っているとき、牛がその人の方に振り向いてこう言いました。『私はこの為に創られたのではありません。農耕の為に創られたのです。』」（サヒーフ・アル＝ブハーリー）

アブドゥッラー・ブン・アッバースはこう伝えています。

「神の預言者は、動物同士を闘わせることを禁じました。」（サヒーフ・アル＝ブハーリー、サヒーフ・ムスリム、ティルミズィー）

アブドッラフマーン・ブン・アブドゥッラー・ブン・マスウードはこう伝えています。

**「私たちは神の預言者と共に旅の途中でしたが、途中で彼が一人で少しの間だけ去ってしまいました。彼がいない間、私たちはフンマラという鳥が二羽の子どもを連れているのを見つけ、子どもを捕まえました。母鳥は悲しみで羽を叩きながら私たちの上空を飛び回っていました。預言者が帰って来て「誰がひな鳥を捕まえてあの親鳥を悲しませたのですか？**
**すぐに返してあげなさい。」と言いました。」（サヒーフ・ムスリム）**

ジャービル・ブン・アブドゥッラーは、こう伝えています。神の預言者が、顔に烙印をつけられたロバを見て、怒ってこう言いました。

**「烙印をつけた者に神の呪いあれ。」（サヒーフ・ムスリム）**

預言者の妻アーイシャがこう伝えています。「私が反抗的なラクダに乗っていたときにきつく縄を引きました。そうすると預言者が私にこう言いました。」

**「動物は優しく扱いなさい。」（サヒーフ・ムスリム）**

Yahya bin Said narrated:
ヤヒヤー・ブン・サイードは、こう伝えています。

**「預言者が彼の衣服で馬の顔を拭いてあげていました。誰かがその理由を尋ねると彼はこう言いました。『昨夜、夢で神が私に馬を世話するように叱責したのです。』」（ムワッタア）**

アブドゥッラー・ブン・ジャアファルは、こう伝えています。預言者が通りがかりに子どもたちが牡羊に矢を投げているのを見て、彼らにこう叱りつけました。

**「そのかわいそうな羊を傷つけてはいけない。」（アン＝ナサーイー）**

預言者が口にした呪いの言葉からも、動物を傷つけ、虐待し、姿を変えたりすることがどれほど現世での避難と死後の厳罰を招き、逆に動物への親切によって神から報奨を受け、罪を赦されかがわかるでしょう。イスラームでは動物が感じる身体的、そして精神的痛みや苦しみが認識され、彼らがどのように不正を感じ取るかを教えています。またイスラームでは驚くべきことに、動物が意識と尊厳、そして個別としての自我も持ち合わせていることをも認識しているのです（鳥にはフンマラと名付けられており、ロバにはウカイルと名付けられていました）。

“また大地を、生あるもののために設けられた。そこに果実があり、（実を支える）萼を被るナツメヤシ、殻に包まれる穀物と、（その外の）賜物。それであなたがたは、主の恩恵のどれを嘘と言うのか。”（クルアーン**55**：**10−13**）

---

**Footnotes:**

1
ラクダの殺害自体が神の怒りを招いたのではなく、彼らに送られた神兆を破壊したことで、人々が帰りつく神を否定し、タウヒードの概念を否定したことになるのです。同様に、人間が理由も無く他の動物を傷つけるのは、神が人間に持つように教えている慈悲を否定していることになります。人が動物や植物に対して与えられるべき慈悲を否定するとき、神からの人間に対する慈悲も奪わせ、彼は罰を受けます。さらには、人間が動物や植物（そして人）に慈悲をかけるとき、神もかれの慈悲からその人に報酬を与えるのです。